

De Natura Caritatis

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂田, 登 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/4972

愛の本性について

De Natura Caritatis

坂 田 登(*)

げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく在らん、
而して其のうち最も大いなるは愛なり。

Nunc autem manet fides, spes, caritas, tria haec; maior autem ex his est caritas.

(I Cor. 13:13)

「なんじ心をつくし、精神をつくし、思いをつくして主なる汝の神を愛すべし」
これは大いにして第一の戒めなり。

第二もまた之にひとし

「おのれの如くなんじの隣を愛すべし」

律法全体と予言者とは此の二つの戒めに拠るなり。

《*Diliges Dominum Deum tuum in toto corde tuo et in tota anima tua
et in tota mente tua:*

hoc est magnum et primum mandatum.

Secundum autem simile est huic:

Diliges proximum tuum sicut teipsum.

In his duobus mandatis universa Lex et Prophetiae.》

(Mt. 22:37~40)

信仰 (fides)、希望 (spes) と並んで重要な徳 (virtus) とされる愛 (caritas, agape, charity, love)¹ とははたして如何なるものなのか。特に愛はあらゆる人間の徳の中でも最も重要なものと考えられている。他に如何なる徳を如何に多く所有しようとも、同時にそこに愛がなければそれらは皆むなしのものであるとされる。(I Cor. 13:1~8) このような愛、特に神への愛について考えることはキリスト教倫理学における重要なテーマのひとつでもある。

*福井大学教育地域科学部社会系教育講座

では、そのような愛の本性 (natura) とは一体どのようなものであろうか。ここではトマス・アクィナス『神学大全 (Summa Theologiae)』における愛 (caritas) についての議論に従って考察してみたい。

まず、トマスは愛 (caritas) を神と人間の間に成立する友愛 (amicitia, philia, friendship) であるとしている。友愛とは善意 (benevolentia) に基づく愛 (amor) である。このとき、われわれは愛される者にとっての善を意志するという仕方では誰かを愛するのである。しかし、われわれが善い葡萄酒や善い馬を愛するというとき、それらのものの善さを自らのためにだけ愛しているのである。これは友愛と呼ぶべき愛ではなく、欲望 (concupiscentia) と呼ばれる愛 (amor) である。実際、われわれと葡萄酒や馬との間に友愛が成立するというのはおかしなことである。

しかしながら、善意のみで友愛が成立するわけではない。そこではさらにお互いに両者が愛し合うということ (mutua amatio) が必要とされる。友は友に対してのみ友なのである。このようなお互いの交流 (communicatio, koinonia) の上に相互の善意すなわち友愛が基礎づけられるのである。

そして、神と人間の間に何らかの交流があり、これによって神はわれわれにその至福を共有させる (suam beatitudinem communicare)、すなわち神はわれわれにとっての善をここで意志しているのである。このような交流においてこそ友愛が基礎づけられるのであり、このような amor (愛)こそが caritas (愛) といわれるものであり、caritas とは人間と神の間の友愛の関係なのである。²

もちろん、このような神との間の愛の関係は感覚的、身体的なこの世の生すなわち外面的生 (vita exterior) において成立するものではなく、精神 (mens) における霊的 (spiritualis) な人間の内的生において、たとえ不完全なかたちであるにせよ、成立するものである。そして、このような神との愛の交流が完成されるのは天の御国 (patria) において神の顔を見ることができ

¹ギリシャ語 agape のラテン語訳として caritas という語が当てられている。特にキリスト教的な意味での愛を示す重要な語として eros や philia とは区別された agape (動詞形は agapao) という語が新約聖書や後のギリシャ語キリスト教著作家たちによって用いられている。そして、eros には amor、philia には amicitia というラテン語の訳語が当てられるのが一般的である。しかしながら、後のラテン語キリスト教著作家においては amicitia も神学的文脈の中で重要な意味を持つ語としてよく用いられている。ところで、caritas から派生した英単語 charity はもはや「貧しい人々への援助」といった限られた意味でしか使われなくなっており、英訳聖書においても欽定訳 (1611) までは charity がよく用いられているが、その後、love という語がキリスト教的な意味での愛をも示す語として一般的に用いられている。また、フランス語の charité も Louis Segond 訳 (1910) においては用いられているが、TOB (共同訳 1984) においては用いられず、amour が用いられている。因みに、ドイツ語訳では、Luther 訳 (1545) でも最近の訳でも Liebe となっている。

²ST., II-II, q23, a1.

るときである。³

アウグスティヌスは愛 (caritas) を魂 (anima) の、それ自身のために神を享受 (fruor) することへと向かう運動 (motus) と呼んでいるが、⁴ところで、一般に魂の運動とは魂において創造されたもの (creatum) である。しかし、ペトルス・ロンバルドゥスこのことに関し、愛 (caritas) とは魂において創造されたものではなく、精神のうちに住まう聖霊 (Spiritus Sanctus) そのものであるとした。⁵彼が述べようとしたことは、むしろ、われわれの神を愛するという運動は何かの性質 (habitus) を媒介とせず、聖霊から直接に与えられたものであり、それだけ愛が、信仰や希望と比較しても、卓越した徳であるということであろう。しかし、トマスはこのような考えには問題があるとする。というのも、愛がただ人間の精神を動かす聖霊のみから発出するならば、人間の精神は動かされるのみで自らの愛するという運動の根源 (principium) とはならないことになる。するとわれわれの神への愛は自らの自由に基づく自発的 (voluntarius) な行為でもなくなってしまふ。それゆえ、われわれの精神が神を愛することへと聖霊によって動かされるとしてもそのような行為を為すものはあくまでもわれわれの精神、意志である。しかしながら、そのような愛のはたらきはある意味われわれの意志が自然において有している能力を超えたものでもある。それ故、われわれの能力を愛のはたらきへと促すような何かの性質的形相 (habitualis forma) が自然本性的な能力に付け加えられることが必要であり、このことによってわれわれの能力は快く喜んで愛のはたらきを為すようになるのである。⁶超自然的な愛のはたらきは、確かにそれがわれわれの自発的で自由な意志のはたらきであるとしても、そのためには聖霊あるいは神からの超自然的な助け (恩恵、gratia) が必要なのである。われわれの自由な意志は神の側からの超自然的な恵 (gratia) によって支えられ、常に両者は調和していなければならない。それ故、愛 (caritas) とは単に創造されたもの (意志のはたらき) とも言えず、また単に聖霊のはたらきでしかないとも言えないもの、まさしく両者の調和なのであろう。

アウグスティヌスは愛をわれわれのもっとも正しい心情であり、われわれを神に結びつけ、それによってわれわれが神を愛するところの徳 (virtus) であるとしている。⁷人間の行為とは、それがふさわしい規範と尺度によって (regula et mensura) 治められている限りにおいて善さを持つものであり、それ故、すべての人間の善き行為の根源である人間の徳とは人間の行為の規範

³ST., II-II, q23, a1, ad1.

cf. Phil. 3: 20, Rev. 22: 3

⁴Aug. *De Doctorina Christiana*, III, 10, 16

⁵Petrus Lombardus *I Sent.* 17

⁶ST., II-II, q23, a2.

⁷Aug. *De Miribus Ecclesiasticis* I, II

に到達することにおいて成立するものである。そしてそしその規範となるものとは人間の理性 (humana ratio) と神自身 (ipse Deus) である。そして、愛に関しては信仰や希望の場合と同様に、この神に到達するということにおいて、徳の尺度 (ratio virtutis) が成立する。愛とはまさしくわれわれを神に到達させ、神に結びつけるところの徳なのである。⁸

そしてこれら信仰、希望、愛という三つの徳は、『コリント前書』(13:13)にも述べられているように特別な徳 (virtus specialis) である。特に、愛 (amor) 一般に関してはその対象は善であるとされるが、その対象が特別な善としての性格 (specialis ratio boni) を有している場合、愛もまた特別な愛としての性格 (specialis ratio amoris) を有することになる。しかるに、人間の至福の対象 (objectum beatitudinis) となる神の善 (bonum divinum) は特別な善としての性格を有している。それ故、そのような神の善を対象とする愛 (caritas) は特別な愛 (amor) であり、特別な徳である。⁹また、このような究極の目的を目指すところの徳あるいは技術 (ars) はそれ以外の二次的目的を目指すところの徳あるいは技術に対して命令をする立場にある。それは例えば、アリストテレスが言うように¹⁰、軍事の技術が騎兵の技術に命令を下すようなものである。それ故、人間の生の究極の目的すなわち永遠の至福をその目的とするところの愛 (caritas) はすべての人間の生におけるはたらきに自らを拡大し、それらに命令を下す立場にあるのである。¹¹すなわち神への愛が人間のすべての行為においてそれらを導く中心なのである。すべての人間の行為は神への愛に基づいて為されねばならない。

では、この愛においてわれわれは神と隣人とを愛するのであるが、そのような愛とは数において一なるものなのであろうか。また神を愛する理由もわれわれの間には多くあると考えられるが、それでも愛は一なるものであろうか。しかし、信仰も愛もその対象は神であり、信仰が神の真理の一性に基いて一なる徳であるように、愛もまた神の善性の一性に基いて一なる徳である。

また先に愛 (caritas) は人間と神の間に成立する友愛 (amicitia) であるとされたが、アリストテレスによると¹²、友愛はその目的の相違に応じて異なった三つの種に区分される。すなわち有用性に基づく友愛、快楽に基づく友愛そして善きもの同士の友愛である。また、友愛が成立する交流 (communicatio) の場の相違に基づいてもそれは区別される。すなわち同じ血縁に属する者たちの間の友愛、同じ市民としての友愛、共に異国を旅する者たちの間に生まれる友愛などである。しかし、愛 (caritas) はこれらの友愛のように区分されるようなものではない。というのも、愛 (caritas) の目的とは一なる神の善性であり、また、このような友愛に基づく永遠の至

⁸ST., II-II, q23, a3.

⁹ST., II-II, q23, a4.

¹⁰Ar. *Ethica* I, 1. 1094a12

¹¹ST., II-II, q23, a4, ad2.

¹²Ar. *Ethica* VIII, 3, 11, 12. 1156a7; 1161a10; 1161b11

福の交流 (*communicatio beatitudinis aeternae*) も一なるものである。従って、愛 (*caritas*) とは単純に一つの徳であり、複数の種に区分されるようなものではない。¹³

ところで、『コリント前書』(13:13)においても「最も大いなるは愛なり。」と語られているが、このような愛とはもっとも卓越した徳なのであろうか。トマスによると、人間の行為が善であるのは、それがあるべき規範によって規定されていることに基づく。それ故、善き行為の根源である人間の徳はその行為の規範に到達することにおいて成立するのである。そしてその規範といわれるものが人間の理性と神であるが、神こそは第一の規範であり、人間の理性もまた神によって規定されなければならない。それ故、かの第一の規範に到達することにおいて成立する神学的徳は、その対象がまさしく神であることによって、人間の理性に到達することにおいて成立する他の諸々の道徳的、知性的徳よりも遙かに卓越したものなのである。また、信仰や希望と比較しても、もっとも神に近づくことのできる愛こそより優れたものである。というのも、信仰や希望は、神の側からわれわれに真の認識や善の獲得がもたらされることによって神に到達するのであるが、愛は、神からわれわれに何ももたらされることがなくとも、それ自身によって神へと到達しようとするものだからである。従って、愛は信仰や希望より卓越するのみならず、他のすべての徳よりも遙かに優るものである。¹⁴

また、知性のはたらきである信仰と意志のはたらきである愛とを比較してみるとどうであろうか。知性のはたらきは認識されるものが知性のうちに存在することによって完成されるのであり、その高貴さ (*nobilitas*) はその知性の尺度 (*mensura*) によって決まる。一方、意志のはたらきは意志するものが究極目的 (*terminus*) としてのもの (*res*) に傾いてゆくこと (*inclinatio*) によって完成されるのであり、その偉大さ (*dignitas*) はその対象によって決まる。ところで、魂より下位にあるものはそれ自身においてあるよりも、魂の中に認識されたものとして存在している場合の方がより高貴なものである。しかし、魂よりも上位にあるものに関しては魂の中に存在しているよりもそれ自身において存在している場合の方がより高貴なものである。それ故、われわれよりも下位にあるものについてはその認識の方が、それに対する愛より高貴なものである。それ故、アリストテレスもこのようなものの領域においては知性的徳を道徳的徳よりも高く評価しているのである。¹⁵しかしながら、われわれより上位にあるものに関しては認識よりも愛の方が先立つもの、より重要なものとなる。われわれの知性は完全な仕方で神を認識することはできないが、われわれの意志は完全な仕方で神を愛するものとなる可能性を有しているのである。¹⁶

¹³ST., II-II, q23, a5.

¹⁴ST., II-II, q23, a6.

¹⁵Ar. *Ethica* X, 7&8. 1177a12; 1178a9

¹⁶ST., II-II, q23, a6, ad1.

さらに希望と愛とを比較してみるならどうであろうか。両者の対象は同じひとつの善（bonum）すなわち神である。しかし、愛が神との結合（unio）を含意しているのに対し希望においてはそこにはまだ距離が存在する。希望において神はまだ到達が困難な対象であるが、愛においてわれわれはすでに神と結ばれているのである。¹⁷では、なぜわれわれの地上の生において希望と愛の両方が必要なのであろうか。愛によってなるほどわれわれはこの地上の生においてもしっかりと神に結びつけられているが、地上にいる限り神との間にはまだまだ無限の隔たりが存在する。そこは「死の谷の陰」でもある。このような生においては、希望を持ち続けなければわれわれは一刻たりとも生き続けることはできないのかもしれない。

では、先に愛がなければいかなる徳があろうともそれは虚しいと言われたが、愛がなければ、本当にいかなる徳も真の徳とは言えないのであろうか。愛なき者も、例えば裸の者に着せ、空腹の者に食べさせたりといった善い行いをするのではないか。不信仰で愛もない人たちでも貞節（castitas）や正義（justitia）を持っていることもあるのではないか。さらに知識（scientia）や技術（ars）といった徳は罪人たちの中にも見いだされるのではないか。

さて、徳とはそもそも善へと秩序づけられたものである。善とはその主要な意味において目的である。というも目的に向かうものは目的への秩序においてでなければ善きものとは言われなからである。ところで目的といわれるものには究極のものと隣接するものがある。そして同じように究極の善と隣接のあるいは特殊な善とがあり、人間にとって究極的で主要な（最も重要な）善とは神の享受（fruitio Dei）である。このような究極の善へと人間を秩序づけるものは愛である。しかるに二義的で特殊な善は二とおりに分けることができる。すなわち、それ自身において究極目的であるところの主要な善へと秩序づけられうる（ordinabile）真の善と、本来の目的としての善からわれわれを引き離してしまうような見かけだけ（apparens）の決して真とは言えないような善である。

こうして、真の徳が端的に言えば人間の主要な善へとわれわれを秩序づけるものであるならば、いかなる真の徳も愛なしでは成立し得ないということになる。しかし、何か特殊な目的への秩序においてのみ徳が考えられるなら、愛を欠いていてもそれが何らかの特殊な個別の善をもたらすものであるならば徳ということもできるであろう。愛を欠いている人間であっても、たとえそれが単に自らの利益のためにだけであっても、そのために何か特殊な個別的な善を為すことができる。例えば、商人が利益を上げるという目的のために、その商売において正直であったりする場合である。しかし、そこで求められている善が真のものではなく見せかけだけのものであるならば、そのような善をもたらすだけの徳もまた真の徳とは言えなくなるであろう。貪欲なものがいかに思慮を有していようと、あるいは正義、節制、勇気を有していようとそれらは真の

¹⁷ST., II-II, q23, a6, ad3.

徳ではないのである。しかし、そこで求められている特殊な個別の善が真の善であるなら、例えば国家の保持 (*conservatio civitatis*) のようなものであるなら、それは真の徳と言えるかもしれない。しかし、それが終局的で完全な善 (*finale et perfectum bonum*) へと関係づけられるものでないなら、不完全な徳である。やはり、真の徳とは愛を欠いては成立し得ないものなのである。¹⁸

ところで、愛を欠いている人間の行為は二とおりに分けられるであろう。ひとつはそれによってまさしく愛が失われてしまっているようなものへの秩序において何かが為される場合である。そしてこのような行為は常に悪でしかあり得ない。信仰を欠いた者の行為が常に罪 (*peccatum*) でしかあり得ないのと同様である。たとえ彼が裸の者に服を着せてやったとしてもその目的は不信仰の目的あるいは愛を欠いた目的のためでしかあり得ない。もう一つは、たとえ愛を欠いているとしても、愛の欠如によってではなく何か他の神からの賜物 (*donum*)、例えば信仰や希望、あるいは罪によっても取り除かれてはいない自然の善に従って何かが為される場合である。この場合、愛が欠けていてもそれは善き行為でありうる。しかし、そこにあるべき究極目的への秩序付けを欠いている限りにおいてそれは完全な善とは言えない。¹⁹

また、愛 (*caritas*) はあらゆる徳の形相 (*forma*) でもある。道徳的な事柄において行為の形相は目的の観点からとらえられる。というのも道徳的行為の原理 (*principium*) となるものは意志 (*voluntas*) であるが、その意志の対象すなわち目的がいわば意志の形相の役割を果たし、行為の形相は行為者 (あるいはその意志) の形相に従う。そして、道徳的事柄において行為に目的への秩序を与える意志がまたそれに形相を与える。言い換えるならば、意志によっていかなる目的への秩序づけを与えられるかによってその行為の形相すなわちそれが本質的にいかなる行為であるかが決まるのである。しかるに、他のすべての徳による行為は意志のはたらきのひとつである愛によって人間の究極目的 (*ultimus finis*) へと秩序づけられねばならず、このことによって徳は徳として成立する。それ故、愛こそは他のすべての徳による行為にまさしく徳としての形相を与えるものである。このことの故に、愛はあらゆる徳の形相であるといわれるのであり、あらゆる徳の行為は愛によって形作られるものなのである。愛によって形作られていない徳の行為は、それがいかなる行為であっても見せかけのものなのである。²⁰

ところで、愛 (*caritas*) とはそれにもとづいて永遠の至福の交流 (*communicatio*) が与えられるところの人間の神に対する友愛 (*amicitia*) であるが、このような交流は自然の中に存在す

¹⁸ST., II-II, q23, a7.

¹⁹ST., II-II, q23, a7, ad1.

²⁰ST., II-II, q23, a8.

るような善ではなく、恩恵として与えられるものである。『ロマ書』（6：23）においても言われているように神の恵みは永遠の命（*gratia Dei vita aeterna*）なのである。それ故、愛とは自然の能力を超えたものであり、自然本性のような仕方であれわれに内在するものでもなく、自然の力によって獲得されるものでもない。それは聖霊（*Spiritus Sanctus*）によって注がれるものである。聖霊とはまさしく父と子の愛（*amor Patris et Filii*）であり、それがわれわれにおいて分有（*participatio*）されたものが愛（*caritas*）なのである。²¹このような愛とは聖霊の全く自由な意志²²のみによってわれわれに一方的に与えられるものであり、それに先立つわれわれの側の自然本性的状態や自然本性的に有している徳の能力に応じて与えられるものではない。プラトンにおいても神から一方的にわれわれに与えられるところの狂気（*mania*）としてのエロスは重要なものであるが、地上に生きる不完全な人間としてのわれわれは神から与えられるものがなければ、善きことは何一つ為し得ず、自らをより完全な者にしてゆくこともできないのである。そして神からわれわれに与えられる恩恵、賜物の中でも最大のものが愛なのであろう。

²¹ST., II-II, q24, a2.

²²Cf. Joan 3:8 *Spiritus, ubi vult, spirat, et vocem eius audis, sed non scis unde veniat et quo vadit; sic est omnis, qui natus est ex Spiritu.* 「風は己が好むところに吹く、汝その聲を聞けども、何処より来たり何処へ往くを知らず。すべて霊により生まるる者斯くのごとし。」